「地域とともにある学校づくり推進事業」

気づき、考え、行動する子　～地域から学ぶ～　　蒲郡市立西浦小学校

1　実践のねらい

(1)　西浦の「もの・こと・人」と関わる体験活動を通し、地域への愛着を育てる。

本校は蒲郡市南西の海に囲まれた西浦半島にある。裏山にはフクロウやキツネなどが時折現れる。子供たちが「故郷」を誇りに思い成長して欲しいと考え、西浦の自然や人と関わる体験活動を多く取り入れた。

(2)　地域の一員としての喜びを味わう体験を通し、社会参画意識を高める。

少子高齢や過疎化の問題を抱える西浦。子供たちが「町のためにできること」を考え実行し、地域に「役立っている」体験が、地域の一員としての自覚を深めると考え、地域の課題解決に向けた活動を仕組んだ。

2　実践の内容

きじっ子の森で遊ぶ１年生

１年は、森の専門家（愛知県教育・スポーツ振興財団）が考えたクイズをカラー印刷し全校児童に配付した。クイズを解きながら身近な自然に関心を向けて学校の裏山「きじっ子の森」を何度も探検し、拾った枝や葉、木の実等を使い、組み合わせやポスターカラーでの着色の工夫をして個性的な作品に仕上がった剣や楽器等を友達や上級生に紹介した。森や浜辺遊び、麦の種まき、麦踏み等、西浦の豊かな自然を実感した。

真剣に地域の話を聞く２年生

２年は「麦刈り体験」「町探検」「豆腐作り」をした。インタビュー活動では「子供たちの笑顔が見たい」「お客さんに喜んでもらえると嬉しい」など地域の人（西浦児童館、中甚呉服店、有限会社丸キ豆腐店、鳥倉精肉店、壁谷米穀店、岡田屋）の温かさに触れた。豆腐作りでは「美味しく豆腐を食べてもらいたい」と願う職人さんの思いを知った。地域の人と何度も関わり「西浦には素敵な大人が沢山いる」と気付いた。最後に学習内容を模造紙や四つ切画用紙にまとめた。掲示移動や工夫がし易い為、意見交換や発表等、目的に合わせて使うのに効果的であった。

釣りをする３年生

３年は釣り名人（ポイント釣具店）に教わり、知柄漁港で釣り体験をした。アジ、メバル等、多種の魚が捕れた。子供たちは、バケツに釣った魚を入れて観察することができた。シェフ（料理店Cutina Cono）に「さばき方」を教わり、素揚げ、南蛮漬けや吸い物を調理してもらった。様々な食べ方で味わい、西浦の海の豊かさを実感するのに有効だった。「油で揚げれば骨も食べられ、あらは出汁に。捨てる所は無い」「魚の命を頂く。大切に食べて」と教わった。「潮干狩り」「アマモ」の種植え」「漁師さんインタビュー」「トロ箱作り（トロ箱用木材）」は、海や海に携わる人と年間を通して関わり、西浦の海の良さと恵みに感謝の思いが生まれた。なかでも、トロ箱用木材セットは、切る必要が無く、子供たちが図工で習った釘打ちを生かして制作できた。作った箱を漁師さんが使うという達成感も味わうことができた。

海岸清掃をする４年生

４年は「環境チャレンジ（鬮海岸の生物観察）」「アマモ（竜田海岸の生物）観察」を蒲郡漁業協同組合西浦支所、生命の海科学館の協力のもと行った。捕った生物は水槽に入れ「西浦の海水族館（水槽の塩で子供は海水を汲む必要が無く、教室近くで飼育できた）」と名付け世話や観察をし、分かったことを模造紙や画用紙にまとめ、下級生への紹介や公民館展示を行い、西浦の海の良さを広めた。「生物は海で快適か」の疑問を解決する為、専門家の平井研さんを招き「海と浜辺の環境」について聞いた。「西浦の海は環境良好」で「生き物を苦しめるのはゴミ」だと分かり、竜田・鬮海岸の清掃を行い、回収したゴミ袋の数でゴミの量を実感することができた。常に専門家から正しい知識を得ながら課題解決を目指した。

お年寄りと交流する５年生

５年は、老いを体感するのに有効な高齢者体験グッズを身に付けた後「西浦はお年寄りに住みよい町か」を考えた。悠々会、児童委員、蒲郡市長寿課、西浦公民館の協力により、高齢者の活動が沢山あると知った。高齢者が求めるものから「自分たちができること」を考え、高齢者向けポスターを作り、町内の店先や掲示板に貼った。その他にも「匂い袋作り（ラベンダーを麦茶パックに入れ、麻ひもで縛ると、子供たちが縫った布袋から花がはみ出ず香りを感じることができる）」「感謝会（折り紙の飾りで体育館を華やかにし、模造紙でお年寄りに見易い双六を作った）」「敬老の日の葉書作り（上質紙にカラー刷りして作成）」を行った。「お年寄りに喜んでもらおう」と、常に相手を意識した活動で、人の為に動く素晴らしさを感じた。

テント等を設営する６年生

６年は、避難場所の情報を集め、避難経路のマップ作りを行った。避難バッグの中身を考える授業では、避難するときに必要な物を絵カードで表し、テープ糊を付け、自由に貼り替えができるよう工夫したことで、意見交換をしながら熟考することができた。地震が起きたら最高学年として何ができるかを知る為に、市危機管理課の方に「学校の防災グッズ」について聞き、簡易テントやベッドの設置の仕方、飲料水や食料などの備蓄品を確認した。また、市危機管理課の方の「避難所の収容人数がある。できる限り家で生活できる準備を」「みんなで協力できることを」という思いを受け、学年を「避難所設営側」「避難する側」の２つに分け、避難所づくりにおける対応等を試演した。「幼い子と遊ぶ」「お年寄りの話し相手」「物資の運搬や配布の手伝い」「案内」等ができると考えた。各地区の総代に報告し、今後の地域課題を共有することができた。

特別支援学級は卒業遠足資金作りの為、自作のうちわや匂い袋等を地域の人に販売した。沢山買ってもらったお礼に校内を通る公道で花を育てようと、苗をプランターに植え世話をした。この活動は地域の人の心を癒し、「綺麗だね」と声をかけられた子供の心も優しく包んだ。子供と地域との交流の場になった。

3　実践の成果や課題

自然や人を中心に地域とたっぷり関わる体験をしたことが、地域への関心を高め「知りたい。やってみたい」思いを膨らませ「地域を誇りに思う」気持ちを育んだ。また、学年に応じた目標をもち、自分たちにできることを考え、企画実行したことで「自分たちにも、地域のためにできることがある」という達成感や喜びに繋がった。